

実践報告：日本人学校訪問プロジェクト

杉原早紀 Saki Sugihara

(ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学科 Universität Hamburg,
Asien-Afrika-Institut, Abteilung für Sprache und Kultur Japans)

要旨/Zusammenfassung

BA 課程の導入に伴い、コミュニケーションで実践的な日本語能力の習得がより求められるようになってきたが、ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学科でも 1 ないし 2 学期間の日本留学が新課程の学生に必修単位として義務付けられている。そのため本学科では、留学に向けた言語面およびメンタル面の準備として、学生にドイツ国内で擬似日本体験をする機会を与える目的で、第 4 学期の日本語授業の中で日本人学校訪問プロジェクトを行った。本論考では、その内容、経過、準備とフィードバックについて紹介する。

Mit der Einführung des BA-Studiengangs hat der Erwerb kommunikativer und praxisnaher Sprachkompetenz zunehmend an Bedeutung gewonnen. Um dieses Ziel zu erreichen, ist für BA-Studierende an der Abteilung für Sprache und Kultur Japans der Universität Hamburg ein Japanaufenthalt von einem oder zwei Semestern verpflichtend. Als sprachliche und situative Vorbereitung auf das Auslandsstudium haben wir im Rahmen des Sprachunterrichts für das 4. Semester das Projekt „Besuch der Japanischen Schule“ entwickelt. Hierbei sollen die Studierenden bereits in Deutschland die Erfahrung einer japanischen Umgebung machen können. Die vorliegende Studie stellt Inhalt, zeitlichen Ablauf, Vorbereitung und Reaktionen der Beteiligten innerhalb des Projektes vor.

1 新課程と語学コースの位置づけ

ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所では、2007 年 10 月から新 BA 課程 (Internationaler Bachelor Studiengang Ostasien mit dem Schwerpunkt Japanologie 以下 IBO) が導入されている。修業年限 4 年 (8 学期間) のこの課程においては、その名称に international を含むことから見て取れるように、留学が課程の一部とされており、日本学を専攻する学生には、最低でも 1 学期、可能なら 1 年間、原則として日本の大学へ留学することが卒業の要件として義務づけられている。カリキュラムの中でも日本語の習得は主要な柱となり、学生は卒業までの必

須取得 150 単位のうち、語学コースで 56 単位¹を、日本留学の単位換算で 30 単位を取得しなければならない。また在学期間中は、専門課程科目中心の第 5 学期以上においても最終学期の第 8 学期を除く全学期で語学コースが用意され、選択必修となっている。このように日本語習得を重視するのは、BA 課程の目的が専門知識や職業に直結する知識・能力の獲得に置かれているためである。これらのことから、BA 課程で習得されるべき日本語能力も、1. コミュニケーション能力、2. 専門知識や職業に直結する能力だと考えられよう。このような日本語力を短期間かつ効果的に身につける機会として留学が義務付けられているのであり、これは学科の履修規定²にも明記されている。

これらの変化の中で、日本語の授業もそれに対応していくことが求められるが、ここで簡単に BA 課程の学期毎の語学コースの概要を紹介しておく。第 1-2 学期では初級日本語の授業が週 12 時間、第 3-4 学期では中級日本語の授業が週 10 時間あって、現代日本語の基礎能力の習得が図られるほか、第 3-4 学期では週 4 時間の文語の授業も加わって、専門課程での文献読解の基礎能力も培われる。第 5 学期からは専門課程になるが、第 6-7 学期のうちどちらか 1 学期、あるいは両学期が日本への留学期間と規定されているため、第 5 学期は学年の学生全員が一緒に授業を受ける最後の学期となる。そのうち週 4 時間は必修の語学コースの授業が行われる。また、第 6-7 学期でも留学していない学生は、同様に週 4 時間語学コースが必修となるが、その場合第 6 学期の授業の参加者は日本留学前の学生、第 7 学期は日本留学後の学生ということになり、両者を分けたグループでの授業が行える。

1 第 5 学期までの必須取得単位。第 6-7 学期で留学しない場合は、各学期でさらに 6 単位ずつ取得する必要がある。

2 学科履修規定 (Fachspezifische Bestimmungen für den Internationalen Bachelor-Studiengang Ostasien im Hauptfach vom 5. März 2008 und 8. April 2009) の第 1 条には「1 ないし 2 学期間、専攻言語の国に滞在することにより、外国での体験、当該国に関する知識ならびにコミュニケーション能力が育成されるが、これは専門知識の面だけでなく、将来の職業を考えるためにも不可欠のものである。(Anhand eines Auslandsaufenthaltes ... von einem bis zwei Semestern ... im Schwerpunktland werden Auslandserfahrung und Landeskenntnis sowie kommunikative Kompetenzen erlangt, die über die fachspezifischen Kenntnisse hinaus für die spätere Berufsorientierung unabdingbar sind. 邦訳筆者)」という記載がある。

全体の枠組みが BA 制度への移行に伴いこのように変更されたことにより、内容も制度へ適応させることが必要となるが、全員が留学することを前提とする以上、教室内での日本語学習と日本留学との橋渡しを行うことも一つの課題となる。そこで、あくまでも留学前の日本語授業の枠内にとどまりながらも、オーセンティックな環境で日本語話者との交流を経験させることで学生に疑似日本体験を得させようという目的を持って、日本人学校の訪問を計画・実行した。

言語学習面のみでなく、むしろ実際の交流を通して、間近に迫った留学や日本滞在中の様々な場面をリアリティを持って想像し、メンタル面でも自分に不足していることや準備しておくことなどに関して学生自身の気づきがあってほしいという思いも教師側の期待として大きくあるのだが、それは個人差が大きく、教師のコントロールのきかない部分でもある。よって、この点は今回の報告ではあくまでもプロジェクトの副産物ととらえることとしておく。

2 ハンブルク日本人学校

さて、具体的にプロジェクトの詳細に移る前に、ハンブルク日本人学校について簡単に紹介しておく。ハンブルク近郊のハルステンベックにある同校は、公益法人として、ドイツにありながら日本の小中学校のカリキュラムに沿った教育が行われている。2009年4月現在、教職員20名、児童生徒73名、幼稚園児21名が在籍しているが、教職員の大半は文部科学省から数年間の予定で派遣されており、児童生徒園児はハンブルクや近郊の日本企業への駐在員の子女がほとんどで、週2回ドイツ語の授業が行われるほかは、学校運営は日本のそれと変わらない。クラスは学年別になっているが、学年によっては児童生徒数が少なく、10人を下回るクラスもある。ハンブルク大学日本学科と日本人学校との交流は、学校側から教員研修の一環として大学を訪問したいという申し出があったことから始まり、これまでに、教員研修と大学生の学校訪問がそれぞれ2回ずつ行われたほか、教職員の方々と日本学の学生の間タンデムを仲介したり、学生の実習を学校側に受け入れてもらうなど、個人レベルでも交流が行われるようになっていく。

3 プロジェクトの概要

では、ここから 2009 年に行った実際の学校訪問について述べていこう。学校訪問は第 4 学期対象の「日本語 IV—会話」の授業の中で行った。この授業は週 1 回 2 時間 (90 分) のコースで BA 課程の第 4 学期の学生には必修であり、「日本語の中級」を教科書として会話や表現練習をするほか、ロール・プレイやミニスピーチなどで口頭能力を伸ばすための活動を行った³。このような教室活動を行う一方で、学期計画の中に日本人学校訪問を組み込み、訪問のための準備や振り返りの時間を持った。また、授業に当たっては、日本からの交換留学生を一名ボランティアのティーチングアシスタントとして迎えることができたが、彼女から学生の発表内容や表現などについてアドバイスや参考意見が聞けたことも、学生の準備に役立ったと思われる。訪問に向けての学生の課題は、児童生徒園児たちとの交流活動の準備がその中心であり、各学年の子供たちの発達段階にあわせた活動内容やテーマの選択、訪問先のクラスでの交流活動の準備をする他、子供たちの年齢に応じた話し方や語彙選択を考えつつ、活動を言語面で準備していった。この交流活動は、予行演習として大学の教室内で実際に各グループが発表して、お互いに講評し合ったうえで訪問当日へむけさらに修正して万全を期した。この発表は「日本語 IV—会話」の授業の一学期の成果と見なすことができるので、授業の成績評価の対象とすることに決め、コンセプト、パワーポイントや道具等の準備、日本語の表現および流暢さなどについて採点も行った。

具体的な日程としては、6 月 18 日を学校訪問の日として決定したので、その直前 2 回の授業で予行演習かつ評価を行い、それまでに準備が終わるように学期計画をたてた。4 月に夏学期が始まるとすぐ学生を 2 人または 3 人ずつ 10 グループに分け、それぞれのグループを幼稚園、小学校 1 年生から中学 3 年生の合計 10 クラスに割り当てる。4 月中にグループごとに交流活動の内容を決定し、訪問日までの準備スケジュールを考える。5 月に入ってから、授業の中では特に準備をせず、授業開始時のウォームアップを兼ねた会話の中で進捗状

3 2009 年夏学期の授業内容。現在は担当教員や教科書も含めたコース運営について試行段階であり、2010 年および 2011 年は異なった授業内容となっている。

況を確認するほかは、授業時間外での個別指導が中心となる。交流活動を具体的に準備していく過程で、日本の習慣や学校制度に関する質問や、活動の中で使う日本語表現のネイティブチェックの依頼などに来るグループが多かった。特に活動用の日本語としては、児童生徒とゲームするために使う日本語表現や、ドイツ語の童謡の歌詞をメロディーに合わせて翻訳するなど、第4学期までの教室での学習にはなかった言語体験をしていくことに新鮮さやおもしろさを感じている学生が多くみられた。訪問が終わった後の最初の授業で反省会を行い、クラスで振り返りの時間を持ったほか、アンケートの形でグループごとに感想をまとめ、簡単なお礼のメッセージをつけて日本人学校へ送った。これに対して、日本人学校の先生方からもフィードバックをもらうことができたので、次の時間にそれを読み上げる形で学生に紹介した。

4 成績評価

以上が、日本人学校訪問に関連した一学期間の授業の流れである。訪問当日のことを述べる前に、ここで、大学での予行演習かつ口頭評価について簡単に述べておきたい。基本的には、この日までに訪問当日に必要なことをすべて準備しておくことになっているが、授業時間の関係で準備した内容をすべて発表することはできない。そこで、始めと終わりの手順はきちんと行うが、交流活動は一部を省略した形で（たとえばクイズなら、問題を読み上げて終わり、答えをめぐるやりとりは省くなど）発表させたことと、教室内では、発表を見る側も日本語学習者なので、必要に応じて理解のための単語リスト（日本語→ドイツ語）をOHPに準備したものを見せるようにしたことが、本番とは違う点である。この教室での発表は、評価のための機会という面を除けば、教師側の意図として一番大きな目的は、準備を余裕を持って終わらせておくための締め切りを設定するということにあった。だが、実際に発表することで、学生同士が他のグループの発表を見て、お互いに講評しあったり、自分たちの発表を振り返ってみて不足や不要な部分などに気づき、本番までに修正するためのよいきっかけとなったようだ。発表後のフィードバックでも、内容についてばかりでなく、どうすれば児童生徒たちにもっとわかりやすく伝えることができるか（距離の取り方、アイコンタクト）や、言葉遣いなどの点でも交流の相手の学年にに応じているかどうか、といったことについても意見が交わさ

れていた。出された意見を参考に、訪問当日まで具体的に何をするか、ということ各グループにまとめさせ、発表を終了した。

5 訪問当日の流れ

当日は、学生全員で最寄り駅に集合し日本人学校を訪れた。訪問のための時間として、学校の授業時間の2時間分を割り当ててもらったことができた。1時間目は通常の授業の代わりに、学生たちが準備した交流活動、さらにゲームや質疑応答などの相互交流を行ったが、2時間目には各クラスで通常授業が行われ、学生は見学（一部参加）して、日本の学校での授業を体験することができた。

日本人学校は現地の小学校やギムナジウムの生徒などと交流活動を盛んに行っているが、そこに参加する現地の生徒児童は日本語が話せず、英語やドイツ語での交流が中心となっている。だから、少し年齢が上の大学生の「お兄さんやお姉さん」が日本語で、ドイツの遊びや歌、あるいは国や文化について教えてくれるという機会は、多少特別なものとして認識されていたようである。各発表テーマは、事前に各学年の担任の先生に要望を聞いた上で、学生たちが自分たちでできることを考えたもので、以下の通りである。

幼稚園：ドイツのゲームや歌、単語の紹介。歌詞を自分たちで日本語に訳し、園児たちと一緒に歌ったり、ゲームで遊んだりする。

1年生：ドイツの子供のゲーム。じゃんけんなど日本の遊びと似ているけれど、少し違うものをパワーポイントを使って説明して見せた後、ゲームで実際に遊ぶ。

2年生：Aschenputtel（シンデレラ）。発表者の二人が語り手となり、子供たちに配役ごとに準備したセリフのカードを配って、一緒に朗読芝居のように上演。

3年生：ハンブルクの動物園の紹介。ドイツで最も長い歴史のあるハーゲンベック動物園について話す。ただし、絵や写真などが少なく言葉も3年生には少し難しかったようだ。

4年生：ドイツの各連邦州の紹介。パワーポイントを使い、各州の産業や名物などを紹介した後、最後にもう一度クイズ

として出題し、理解を確認した。4年生はちょうど社会科で日本の各都道府県について勉強したところだった。

5年生：サッカー。ポルトガル出身の学生がポルトガルのサッカーについて話し、別の学生は自分の妹の参加する女子サッカーチームについて話す。ブンデスリーガ以外のサッカーについて知る機会となればという考えだったようである。

6年生：ドイツと日本のジェスチャー。スキット形式で、同じジェスチャーが日本とドイツで違う意味になるという例をいくつか挙げて見せる。担任の先生の司会で、そのほかのジェスチャーについてもいろいろ話し合っていたようだ。

中学1年生：ボーイフレンドとガールフレンド。小芝居として、ドイツの男女交際のパターンをいくつか演じて見せた。思春期のはじまりの年頃の生徒たちには、少し刺激の強い内容だったかもしれない。

中学2-3年生：ドイツのお菓子。パワーポイントで写真を見せながら、いろいろなお菓子を紹介した後、目隠しをして食べてみてその名前を当てる、というゲームをした。

授業時の予行演習が役に立ったようで、活動はほぼ全グループでスムーズに実施できたようである。言語やコミュニケーションの面で児童生徒たちと多少意思の疎通が難しかった場合も、各担任の先生からサポートを受けることができ、会話やテーマをそれぞれの学年に応じた興味内容へと誘導してくださったり、率先して質問をしてくださったりしていた。各クラスが少人数ということも手伝って、質疑応答から親しく会話が弾むまでも時間がかからず、そのすぐあとの20分の休憩時間には、運動場に出て一緒にスポーツをするなど、かなり親しくなった学級もあった。

授業見学直後、日本人学校の先生と共に学生から口頭でフィードバックを受けたが、児童生徒の積極的な学習態度や日本の学校運営の規律の重視とその実践が深く印象に残ったようである。また、実際の授業を受けてみて、教科にかかわらず漢字の知識や十分な日本語口頭能力が必要であることを実感した学生が多く、教師側の意図通り、日本留学前にすべきことを自覚するいいきっかけとなったことは間違いない。

6 振り返りとフィードバック

学校訪問を終えて一週間後、大学の会話の授業で再度口頭でグループごとの感想を発表したほか、教師が用意した反省シートおよび日本人学校の先生方や児童生徒たちへのメッセージを書いた。

反省シートの中には、〔以下原文ママ〕

「子供の言ったことを答えるのは少し難しく、ざんねんな感じになりました。子供とぜったいに話したかったですから、なんとかできました。ドイツ語だったら、『手と足を使って』と言います。」（幼稚園担当学生）

「日本の授業のやり方は全然違いました。例えば、順番に当たるときは、学生がきりつして、いす自分の前に置き、そして先生の問題に答えます。ドイツの授業では、学生が手をあげて、いすに座っているながら答えます。」（1年生担当）

「子供たちと先生の反応は良かったです。しかし、特別なテーマについて話すのは難しかったです。子供たちはたくさん質問して好奇心を示してくれました。」（3年生担当）

「子供たちはシャイのでもごもごと話しました。それは少しわかりにくかったです。ときどき単語を忘れて、きんちょうしたから、私達は言いたいことは言えなかったことがあります。」（6年生担当）

これらをまとめて、日本人学校の先生方に送付したところ、同様の形式で各担任の先生方が学生たちの発表や日本語についてフィードバックを書いて返送して下さった。特に学生たちがどの程度理解できていたか、また彼らの発表が児童生徒たちにどのように受け止められたかという点は、好意的にはあるが忌憚なく意見が述べられており（「授業の理解は最大5割程度ではないか」「わからない時はお互い助け合っていました」「スポーツを通してコミュニケーションができました」など）、学生には交流活動が全般的にうまくいったこと理由は、必ずしも自分の日本語能力とは関係ないのだと言うことが改めて自覚されることとなった。ほとんどの先生方が、今後の交流や次回の訪問を楽しみにしているというコメントを下さったことも大変ありがたいフィードバックであった。

7 まとめ

以上、学校訪問に向けての準備と実際の訪問の様子を詳しく述べてきた。その中で学生が学んだことを最後にもう一度簡単にまとめておきたい。その内容は大きく分けて、新たな言語体験、留学前の疑似日本体験、そして新たなコミュニケーション体験の3つととらえることができよう。言語体験としては、児童生徒や先生方との会話を通じて、日本語のスピーチレベルの実際の使い分けを体験したこと、また大学以外で日本語を使用することで自身の語彙や漢字能力の不足を実感したことなどが挙げられる。疑似日本体験としては、実際の授業や先生方と児童生徒とのコミュニケーションを通じて日本の学校生活の一端を垣間見ることができたことが大きいだろう。さらに、日本語能力の不足を様々な手段で（ジェスチャーや絵、高学年以上では英語も交えて）補いつつ児童生徒や先生との交流を概ね成功させることができたことは、コミュニケーション上の一種の成功体験といえ、異文化圏での滞在の意識面の準備として意味が大きいと考えられる。

準備および実施において、学生、受け入れ側の日本人学校の先生方さらに教師にとっても時間や労力の負担は多いが、以上見てきたようにその成果と意義はそれに見合うものだと言えよう。ただ、これまでの2回の実施の中で残された問題点もある。一番大きな問題は、グループでの発表を基本とする一方で、グループ分けを学生たちの自主性にまかせ、日本語の能力差を考慮して学生を均等に割り振ることがこれまでできていないことである。ただし、グループ分けに関しては学生同士の人間関係が影響するという事情もあり、教師が介入しにくい面もある。ただ、グループごとのレベル差が大きくなってしまう場合があり、訪問先のクラスの児童生徒の交流活動に対する満足度がそれに左右されてしまう点については今後改善していかなければならない。さらに今後の課題として考えているのは、いかに他の学習活動と関連させていくかである。これまでは第4学期の「日本語 IV-会話」の授業の中で単独で学校訪問を行ってきたが、たとえば事前学習と関連づけて読解の授業で日本の学校制度に関する文章を読むなど、より深くかつ多角的な活動へ広げていきたいと考えている。今後も試行錯誤を経て、ハンブルク大学の中級日本語学習の一つの柱となるような活動にすることをめざしていきたい。